

行くぞ荒波、一直線!

庄山 晃

世代の団塊 釣り師

気心の知れた釣友たちとの仕立船。計画だけはあれもこれもと欲張って出港する。冗談をかわしつつ、沖で糸を垂らすだけで満足。釣れなくてもよし。釣れたらなおよしの至福の時間。

釣りライター

第33回 金沢漁港からマダイとイシモチに挑戦

仲間の「楽釣会」で「木川丸」を仕立てた

この新春から本誌に新しく仕立専門船が参入した。金沢漁港の「木川丸」がそれで、鮮やかな黄色の船体に負けず劣らず船長が明朗闊達なら、

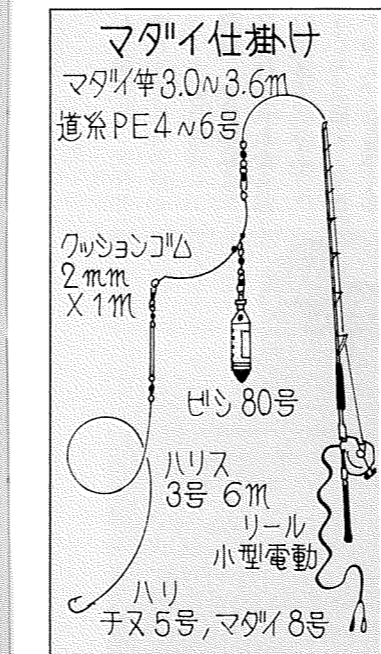


オジサンたちの集まりだ。変である最大の理由は、わたしなんぞを

新旧のおカミさんたちも晴れた冬空のように明るい。

1月9日、同宿のリビータ「楽釣会」の初釣りに便乗取材させてもらった。「楽釣会」と称する釣りクラブは全国にかなりの数があるようだが、東京広尾を拠点とする「楽釣会」

の命名の由来が面白い。同所にある割烹「楽」に出没する面々が美味と美酒に酔乱しては、天下国家を論じつつも、同店のショーケースに自分の釣魚を並べたい一心で立ち上げた会。

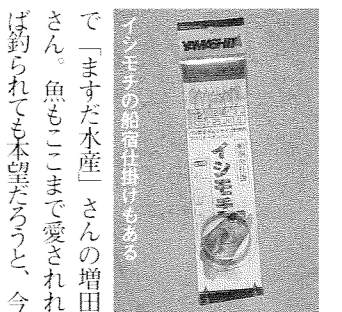


この日も参加した会長らしき人は関西方面を自稱する菊吉さんで、当連載の24回目に命を削りながら釣りをすすめるスゴイ人と紹介した。事務局長らしきは、人呼ん

5人目は五代さんで、愛車にチャイルドシートと車椅子を常設するよき爺、よき孝行息子である。「木川丸」のマダイ釣りではオデコなしの頼もしい人。

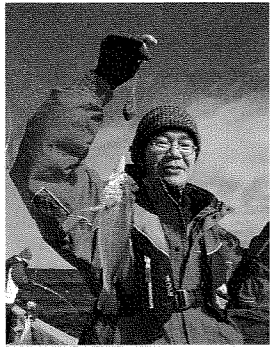


マダイ釣りの道具は一式用意されている



インマエの船宿仕掛けもある

行くぞ荒波、一直線!



いつもは関西方面船長から兄弟子と呼ばれる氏家さんも例会の常連なのだが、この日は心筋梗塞で緊急手術を受けたベッドの上。たぶん、本誌のページを繰っては地団駄するだろうが、幸いにも快方に向かっている。



平日はこうした5人からの仕立を受け付けてくれる「木川丸」。この日は片舷に3人ずつで、てんでに好きな釣り座へと入った。



ヨソ、仕掛け一組、付けエサ、タオル、竿掛け一式がさりげなく事前に釣り座に用意されていて驚かされる。

マダイ、イシモチ、キスと仕立ならではの魚種多彩

さて、この日は7時半に出船し、まずは久里浜沖の70mダチをめざした。

40cm超級のマアジも顔を出し始めて船中ガンと盛り上がったが、潮時もあったイシモチへの転戦を決める。移動の合図の直前、五代さんが小振りながらもマダイを釣って、同船でのオデコなしのジnkクスを守る。

これを契機に良型のアジがまじり出した。30cm少々のマアジが大半だったが、これは夏場と違って腹にも上質な脂肪を蓄えており、予想を超える逸品だった。

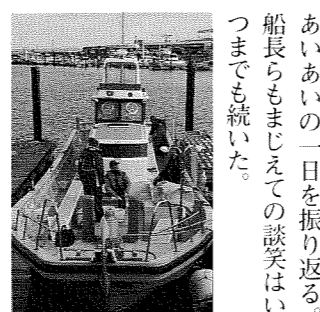
ベトベトのノルウェイ産サバより格上の美味となった。サバに行く手を阻まれるなかでも、きつちりとマダイを釣ったのは増田さん。プラス1mのタナで0.7kg級をヒットさせた。

「新健丸」がすでにいて、キラキラと魚鱗を光らせて良型を次々と取り込んでいた。

下は越冬中のシロギス。金沢八景の真沖30mダチで、イシモチとの両狙いだ。



明るく気さくな船長とファミリがお世話をしてくれ



船長らもまじえての談笑はいつまでも続いた。

魚扱いが上手い スゴイ人 名付けて「ますだ水産」

「ますだ水産」と呼ばれる増田誠さんの釣り歴は長い。ご幼少のみぎりには有栖川宮記念公園で監視員の目を盗んでクチボソ釣りに熱中。ヒロちゃんと組んで四ツ手網にもエスカレート。

後年、海釣りにはまって、横須賀に2年間移住しては、岸壁や防波堤釣りをマスターし、本格的な船釣りへと転向する。

釣れた魚はどんな下魚でも大切に扱い、料理してしまう釣魚への愛情深さや、探求心の強さが、周囲を感嘆させて「ますだ水産」のニックネームを頂戴した。

先ごろ、やっと奥方の許可が下り、念願の舟盛りの器を入手して、腕を振るえるようになった。お子さんたちの夏休みの宿題は毎年、魚拓と決めて頑なに実践中。